

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2008.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 大橋 康二

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



かいゆうちゃわん かわくじらで 灰釉茶碗(皮鯨手)

館蔵資料 (18-6810)

肥前・唐津焼 1590~1610年代

口 径：13.6cm

高 さ： 8.5cm

高台径： 5.2cm

唐津焼に皮鯨や皮鯨手と呼ばれる一連の作品があります。茶碗などの口縁部を鉄釉ないし鉄絵具で黒く縁取ったもので、白っぽい地肌に縁だけ黒いその様子が鯨の皮と身を思わせることからこう呼ばれています。瀬戸唐津などの平茶碗に多いのですが、この茶碗のような深い茶碗もみられます。また茶碗だけでなく、香炉や深めの杯（いわゆるぐい呑み）などにも見ることが出来ます。

この茶碗もわずかに端反りになった碗形（わんなり）の器形で、全体に灰釉が掛り、口縁部の鉄の縁取りはやや控えめではあるものの、皮鯨手の特徴を備えています。

特別企画展のお知らせ

「土の美 古唐津 －肥前陶器のすべて－」展

○趣旨

肥前の陶器すなわち唐津焼の生産は、天正年間（1573～1592）に岸岳城（唐津市北波多）周辺で始まります。文禄2年（1593）波多氏の改易により窯場が岸岳から南部へ移動・拡大し、慶長年間（1596～1615）には生産量が増大し、全国に流通するようになります。こうして唐津焼の作風は、当初の岸岳系の藁灰釉から絵唐津中心になり、また豊臣秀吉の朝鮮出兵を契機とし17世紀初頭には朝鮮から技術が導入され、三島手や二彩手など新たな装飾技法による唐津焼が始まります。その後は京焼風陶器や現川焼、献上唐津など時代に合った多様な唐津焼が生まれました。

製品の種類は茶の湯で用いる水指や茶碗などの茶道具、皿や碗、向付などの食器、壺、甕や瓶などの貯蔵具、擂鉢や灯明具などの各種の生活具など多岐にわたっています。



藁灰釉壺 1580～90年代

当展覧会では、近年の古窯跡や消費地遺跡における研究の成果をふまえ、新たな見方で唐津焼の変遷と魅力を紹介するものです。

○主催及び会場 佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2・第3展示室

○会期 平成20年9月27日(土)～11月9日(日)
44日間(会期中無休)○観覧料 大人620円(510円) 大学生300円(200円)
高校生以下及び障害者の方無料

※()内は20名以上の団体料金

○出品点数 230件及び古窯跡出土陶片500点

○展示内容

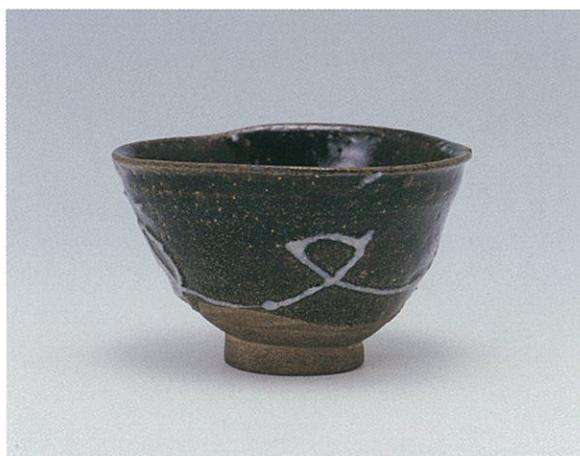
- | | |
|--------------|-------------|
| 1 唐津焼の誕生 | 2 唐津焼の飛躍と普及 |
| 3 唐津焼のその後の展開 | 4 多様な唐津焼 |
| 5 窯跡出土陶片 | |

○印刷物

展示品を掲載・解説した冊子を刊行します。



鉄絵萩文壺 1590～1610年代



黒釉素面手茶碗 1590～1610年代



型紙刷毛目唐花唐草文大皿 1610～40年代

「新収蔵品展」

- 会期 平成20年7月1日(火)～7月21日(月)
- 内容 平成19年度に購入・寄贈により新たに収蔵した資料を紹介します。今回は、古唐津の藁灰釉壺、緑釉大皿の古伊万里の色絵竹梅菊鳳凰文角皿などを展示いたします。
- 展示数 43件 60点(予定)
- 会場 第1展示室



象嵌型紙摺花文皿
肥前・唐津焼 1610～40年代

テーマ展 夏休み特別展 「やきもののかたち－人と動物－」

- 会期 平成20年7月23日(水)～8月31日(日)
- 内容 陶磁器でできた人形などを展示し、その製法や意匠を楽しく解説します。
- 展示数 40件 40点(予定)
- 会場 第1展示室



色絵仔犬置物
肥前・有田窯 1670～90年代

テーマ展 新春展「宴のうつわ」

- 会期 平成20年12月19日(金)
～平成21年1月12日(月)
- 内容 新春にちなみ宴席に用いる器を選び展示します。
- 展示数 50件 60点(予定)
- 会場 第1展示室



釉下彩桐菊花文食器揃
肥前・嬉野・源六製 明治～大正

テーマ展 古伊万里の見方シリーズ5 「有田磁器の形と用途」展

- 会期 平成21年2月3日(火)～2月15日(日)
- 内容 有田磁器の器形や用途を時代ごとに展示します。
- 展示数 60件 70点(予定)
- 会場 第1展示室



色絵松皮菱花唐草文段重
肥前・有田窯 1700～40年代

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて4 英国の肥前磁器コレクション その3

Hizen Porcelain Collections in the UK
ニュー・ヘイルズ(Newhailes)

今回は17世紀末から18世紀初頭の建築様式を今に伝えるスコットランド(Scotland)の館に残る東洋陶磁器コレクションを紹介しよう。この館はエディンバラ(Edinburgh)から東に7kmのマッスルバラ(Musselburgh)に1686年に建築家のジェイムズ・スマス(James Smith)が自宅として建てたホワイトヒル(Whitehill)という名の館であったのが、破産したためにベルランダン卿(Lord Bellenden)に売られ、続いてサー・ディビッド・ダルリンプル(Sir David Dalrymple, d.1721)に1707年に買い取られ、当時所有していた古い城ヘイルズ・カースル(Hailes Castle)に対してニュー・ヘイルズと名付けられ、さらに左右に拡張されたものである。東側に作られた図書室には、サー・ディヴィッドの孫のヘイルズ卿(Lord Hailes, 1726-92)の時には、かの有名なドクター・ジョンソン(Dr Samuel Johnson, 1709-84)がヨーロッパ随一の学究的な部屋と評したほど知識人が集まつたといわれる。その後も手を加えられたが、1739年以来の美しい漆喰装飾や食堂はそのまま今日に至っている。庭も18世紀に設計された風景庭園で、階段状の滝やロココ様式の貝を貼り巡らした人工洞窟などが作られていた。

1971年に最後の当主、サー・マーク・ダルリンプル(Sir Mark Dalrymple)が亡くなると、相続税支払いに代えてその図書がスコットランド国立図書館に移され、その後、維持費の捻出が難しく荒廃の危機に陥った館は、1997年に未亡人のレイディ・アントニア・ダルリンプル(Lady Antonia Dalrymple)から、スコットランド・ナショナル・トラスト(The National Trust for Scotland 略してNTS)に家具、内装もそのままに寄贈された。

1997年12月にNTSの募金担当理事 バーチャル氏(Mr.J.Birchall)の招きで館を訪れた際には、館の修

TANAKA, Shigeko

田中恵子 ●日本アジア協会理事
●東洋陶磁学会（日本）会員
●The Oriental Ceramic Society(London)会員

復工事のために陶磁室 (China Closet) の陶磁器は既に全て外され、梱包されていたので、どのように陶磁器がその部屋の壁一面に架けられていたかは、陶磁器を外す前の写真によってのみ、その一部を知りえたのであったが、2002年9月に再訪の折には、その小部屋は修復前の姿に戻され、四方の壁は元の場所に戻った陶磁器で、天井の際から下へと埋め尽くされていた(図1、2、3)。ドア周り及び壁を縦にいくつかに区切る木の枠には、上から下まで小さな棚が取り付けられ、一つずつ小さな皿、碗、壺、カップ、茶瓶などが乗っている。その枠の中の壁には皿が、大皿は一枚、中、小皿は同じものが横に2枚並んで、上から下まで交互に架けられ、腰位の高さにぐるりと置かれた壁際の棚の上には、所狭しと種々の碗、皿が並び、棚の下の床にも大型の器が溢れて置かれている。一部の壁にマジョリカの皿が並べられているほかは、この館と同時期の中国と肥前の磁器が混じって飾られているが、染付より色絵の方が多い。二つ並んで壁に架けられているいくつかのペアの小皿のうち、縁周りがすいかずら文様の色絵の皿で、なんとなくお互いの雰囲気が異なるものがあり、外して裏面を見るわけにいかないので、管理事務所での裏面の写真を見せてもらうと、果たして一枚には目跡があり肥前と思われるのに、もう一方には目跡がなく、肥前で作られた皿を中国で写したものか、或はその逆か、興味のあるところだが、写真的の写りが悪く、他のペアも点検する時間がなかったことが残念である。

このように実際に当時のままに陶磁器が飾られている陶磁室は、現在、他の貴族の館にはあまり見られなくなつておらず、この3畳位の狭い小部屋にある陶磁器は、17世紀後半から18世紀初頭にスコットランドに到達した東洋からの陶磁器と、そこに混じつ

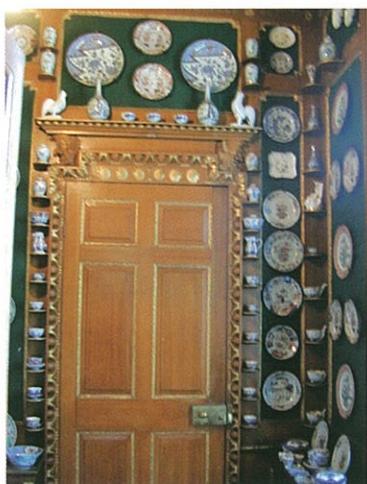


図1 陶磁室のドア周囲の陶磁器



図2 陶磁室の壁面の陶磁器



図3 同壁面の陶磁器

ているかもしれないヨーロッパでのコピーの種類を知る手がかりとなる。ただ、部屋が狭く、写真をとるのが非常に困難で、また、観察するには、はしごか台でもなければ陶磁器に近づくことができないのが難である。

この陶磁室へと続く大きな図書室には、邸内に残ったその他の大型の陶磁器が十数個集められていたが、その中に、肥前の色絵の、鉢1(図6)、短冊窓絵牡丹に獅子文瓶1対(図8)、蓋付大壺1対(図9)、丸卓嵌め込みの大皿1(図7)があった。ほとんどに傷と修理のあとがあり、蓋の上の獅子の飾りの一つは失われており、館の規模から考えて、恐らく状態の良いものから処分された残りなのではと思われる。短冊窓絵文瓶はスクエアリーズ・コート(Squerryes Court、セラミック九州No.43で紹介)にも同種のものがあり、ベルトン・ハウス(Belton House、セラミック



図4、5 色絵皿と裏面

右(4) 有田 1670~90年代 D 12.1cm 広義の柿右衛門様式
左(5) 有田 1690~1730年代 D14.0cm

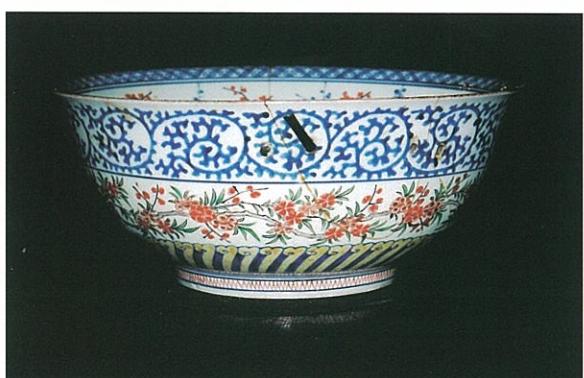


図6 色絵鉢

有田 1690~1730年代 D 35.5cm

九州No.42で紹介)では型も意匠も全く同じものが電気スタンドとして使われており、英國の館ではよく見られるタイプのひとつである。居間の飾り棚には小皿がびっしりと並んでいたが、その中に広義柿右衛門様式の小皿が1枚あった(図4)。この館の調査は一般公開終了後の午後4時30分からであったので、これらの陶磁器の採寸の時間がなく、図の下の数字は、バーチャル氏(Mr.J.Birchall)の依頼で当日NTS本部から同行の蔵品記録担当官ミッチャエル女(Ms.k.Mitchell)から後日、提供されたものである。

インターネットでこの館の名前の綴りを入れると、公開日程も地図も見ることができる。英國の貴族の館には、ほとんどどこにでも、肥前と中国清朝の輸出磁器が飾られているが、盗難を恐れてか、最近はどの館も所蔵品についての情報を出さない傾向があり、この館の陶磁器についても同様である。また、写真撮影も通常は許されていないので、300以上もある公開されている館を順番に訪ね歩き、それから調査願いを出して許可されたら、また出かけて行くということになるが、セラミック九州No.42で紹介した色絵亀乗人物置物のように、それが1665年に295個輸出された記録があり、それまで2個しか存在が確認されていない貴重な品であることを、筆者が指摘するまで持ち主も保険会社も知らずにいたという例もあり、この館でも有田からの専門家による、さらに綿密な調査が待たれる。



図7 丸卓に嵌め込まれた色絵大皿

有田 1700~30年代 D 63.5cm



図8 色絵瓶 有田

1700~30年代 H 49.0cm

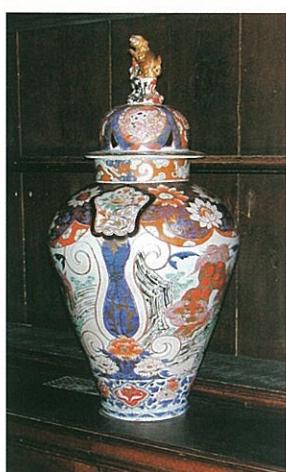


図9 色絵蓋付壺 有田

1710~40年代 H 89.0cm

平成19年度常設特別展の報告

寄贈記念展「旧高取邸を飾ったやきもの－炭鉱王のもてなしの器－」

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2・第3展示室
○会 期 平成19年9月23日(日)～11月25日(日)
61日間(月曜休館)
○出品点数 492件1,444点
○展示内容

平成18年度に寄贈を受けた高取本家コレクションは、杵島炭鉱の創業者高取伊好(これよし)とその後継者高取九郎(くろう)の収集した540件1,721点の陶磁器です。

この高取本家の陶磁器は、明治37年(1904)唐津市城内に建てられた近代和風建築の高取邸(平成10年に国指定重要文化財に指定)の調度品や什器として集められ屋敷を飾り、茶室「松風庵」の景色となり、宴席を楽しませたものです。

こうした食器として使われた鍋島藩窯・大川内山の磁器、数に圧倒される肥前・有田窯や、茶道家であった伊好夫人愛用の中国製の煎茶器などとともに

に、屋敷の床の間、洋間を飾った花瓶や壺類を展示了しました。

○関連行事を開催しました。

記念茶会 10月6日(土)

展示解説 10月6日(土)、11月3日(土)



開会式のテープカット



展示解説



記念茶会

第104回九州山口陶磁展

○会 期 平成19年4月29日(土)～5月10日(水)
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期すことを目的として今回第103回目を迎きました。

今回の展覧会では、第1位の立井清人氏の「埋め込み大鉢」を始め、100点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞 立井清人 埋め込み大鉢

新収蔵品展

○会期 平成19年6月6日(水)～6月21日(木)
14日間

新収蔵品展では、平成18年度に購入や寄贈をうけて新たに館蔵品となった陶磁器を紹介しました。

古唐津の灰釉茶碗（奥高麗）銘「瑞雲」、褐釉白釉打掛三耳付壺や古伊万里の色絵金銀彩山水文四方蓋物、柿右衛門様式の色絵仔犬置物など、また、前年度九州山口陶磁展入賞作の植木薰「うねり」や、二代奥川忠右衛門（1931～2005）「白磁牡丹彫文尊式花瓶」、小野祥窯（1927～2006）「色絵数珠玉文花瓶」などの現代佐賀の作家の作品など合計43件57点を展示しました。

高校総体記念展 ダイナミックな文様－はねる・はしる・とぶ－

○会期 平成19年7月17日(火)～8月29日(水)
41日間

やきものにはさまざまな文様・造形表現が見られますが、人や動物の動きを表わした文様を描いたものや、またそのような姿をかたどったやきものも種々あります。

展覧会では、17世紀から幕末・明治にかけて生産された有田磁器を中心に、人や動物のダイナミックな動きを表したやきもの52件77点を展示しました。



展示状況



展示状況



展示状況

新春展 七福神と吉祥文様展

○会期 平成19年12月20日(木)～
平成20年1月14日(月) 22日間

七福神は福徳をもたらす七人の神として室町時代より信仰されました。やきものの題材としても七福神は登場し、器の文様として描かれたり置物が作られたりしています。展覧会では新春にふさわしい七福神や吉祥文様をあらわした陶磁器67件86点を展示しました。



展示状況

古伊万里の見方シリーズ4 有田磁器の窯詰め技法展

○会期 平成20年2月6日(水)～2月24日(日)
18日間

江戸時代の有田磁器のさまざまな窯詰め技法による作品を並べ、説明パネルや写真とともに、これらの窯詰め技法について展示紹介するもので、有田磁器の体系的収集品として知られる柴田夫妻コレクションを中心とした62件86点を展示しました。

シリーズ

やきものの技法(39)
ハリ支え

有田磁器の窯詰め技法にハリ支えがあります。ハリ支えとは、ハリと呼ばれる小さな円錐状のピンを高台内の数ヶ所において、焼きへたりにより皿などの器面の中央部が下がるのを防止する窯詰め技術です。17世紀後半頃から、皿や鉢などの窯詰めの際に、ハリ支えを行うことが普及します。高台内は施釉してあるため、焼成後にはハリが高台内に熔着していますが、熔着面がごく小さいため、容易にとることができます。この作業を「目落とし」といったりし、またこのハリ支えの跡を「目跡」と呼ぶこともあります。ハリには耐火粘土で作られたハリと、製品と同じ材料で作られた磁器製のハリとがあり、前者は草創期のみにみられます。

写真の皿は1660~80年代の有田磁器ですが、中国・景德鎮窯の芙蓉手皿を模したもので、わずかに簡略化されているものの文様は中国の芙蓉手に良く似ています。しかし、裏面を見ると、高台内にハリが3ヶ所残っています。先に述べたように、焼成の際に熔着したハリは、焼成後にとってしまいますが、ごく稀にこのように熔着したまま出荷されることがあります。泉山の陶石は中国・景德鎮の磁器原料に比べて、いくぶん耐火度が低く、焼成温度が高すぎたりすると、焼きへたりが生じたりする扱いにくい原料だったようです。ですから焼きへたりを防止するため、ハリ支えが必要だったのです。中国磁器の場合、容易に焼きへたりすることが無いため、ハリ支えは必要なかったのです。文様が酷似していても、中国磁器と有田磁器の違いが、高台内の目跡の有無に表れているといえるでしょう。(宇治 章)



染付芙蓉手花虫文輪花皿
肥前・有田 1660~80年代

シリーズ

やきものにみる文様(39)
梶ヶ濱関

館報No.38シリーズの33回目では同様の力士の文様で、小野川関を紹介しました。今回は良く似た力士の文様ですが、梶ヶ濱関が描かれた製品を紹介します。

江戸時代の天明から寛政年間(1781~1801)は相撲ブームが到来し、谷風、小野川、雷電などの力士が活躍した黄金期であったとされます。中でも無敗を誇った雷電為右衛門は土俵生活21年間35の場所をつとめた間に、254勝10敗で勝率9割6分、連続優勝7回という記録をもっています。この西の大関雷電に土をつけた力士は、それだけで名を挙げました。その人が梶ヶ濱力右衛門です。

梶ヶ濱関は宝暦6年(1756年)生まれ。薩摩大隈国桑原郡(現在の鹿児島県姶良郡)出身で、本名を津川力右衛門といい、新入幕した寛政2年の11月場所から引退する寛政6年の3月場所まで最高位を東の前頭4枚目としました。引退の場所では東前頭7枚目です。通算成績5勝7敗6分2無勝負20休で、記録からみるとそれほど華々しく活躍した力士とはいえません。引退してから30年後の文政3年(1820年)3月23日に没しています。

雷電に勝ったのは東の前頭4枚目として臨んだ寛政3年(1791年)4月、本場所5日目のことでした。幕内デビュー後1敗しかしていない雷電の2回目の黒星で、雷電はその後2年間無敗でしたので、その勝利は人々に強い印象を与えたのでしょう。

その短い活躍期から、この染付大皿も、1790~1800年代と推測されます。眉は太く、口をへの字に曲げ、肩をいからせ、大きな手に力をこめているその風貌には特徴があり、なかなかの美男子です。肖像の周りは牡丹唐草文と軍配があらわされ、力士文様の器らしいデザイン構成になっています。(藤原友子)

参考文献：小島貞二著『力士雷電』1998年ベースボールマガジン社



染付力士牡丹唐草文大皿
肥前・有田 1790~1800年代
柴田夫妻コレクション9-129